
インフルエンザ事件

A.I

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフルエンザ事件

【Nコード】

N1623B

【作者名】

A・I

【あらすじ】

このお話は、歩美ちゃんが、インフルエンザにかかって、米化病院に入院するお話である。これが、容態が悪化して・・・大変なことになっていくお話です。

プロローグ（前書き）

今年も、インフルエンザ予防接種の時期がやってきました。今年は果たして、どうなんでしょう？
コナンで描いてみます。

プロローグ

今年もまた、インフルエンザ予防接種の時期がやってきました。
本日、帝丹小学校では、予防接種の日なんですね。
しかし。

歩美ちゃんが、親戚のお葬式のため、欠席。インフルエンザは打てませんでした。

そして、元太くんは、風邪で、微熱が少しあるということで、出来ませんでした。

コナンと、哀と、光彦は打ちました。

そして。

その一週間後。事件は起こります。

ここ、場所が変わって、夜の吉田家のマンションでは、歩美ちゃんが、「お休み〜!」と、夜、寝室へ入りました。

そして・・・そのうち、ご両親も寝る時間が来て、部屋が暗くなり、家族全員、床につきました。それが・・・12...30頃のこと。

そして。

それから、3時間後・・・

歩美ちゃんに異変が起こります。

歩美ちゃんは、咳きこんで、おなかが痛いと言い出して、夜中に起きました。

声もかれています。喉をやられたようです。頭痛いとも訴えています。

そして、トイレ直行……おなかピーシャになってしまっています。

お父さんは、「一体、どうした？歩美・・えらいのか？」と、心配して、額に手をやりました。

熱い！！！！

ビックリしたお父さんは、体温計を取り出して、歩美ちゃんに、「ちょっと計ってみや」

お母さん！歩美が！」と、叫びました。お母さんも側にやってきて、体温計を計らせましたが、ピピッ・・何と驚いたことに、40度！！！！

お母さんは大慌てで、救急車を電話で夜中に呼びつけました。

そして……ピーポーピーポー……

救急車が、夜中に、1台、吉田家のマンションから、通って、出て行ったのです。

場所が変わって、ここは、毛利探偵事務所。

遅くまで、テレビゲームをしていた、コナンは、蘭から、「早く寝なさい！」といわれて、

パジャマ姿で、寝室へ行こうとしました。

すると、「ピーポーピーポー！道をあけてください！左へ寄せて下さい！！！」

と、スピーカーから声がしていたので、コナンは、これが、まさか、

仲間が運ばれたなんて、

この時は、思っています。

コナンは、「うるせーな！ファ・・・」

あくびをして、寝室へ向かい、今夜は、そのまま、寝てしまいました・・・

次の日、学校で、担任の小林先生から、朝のホームルームで、ある、話が出たのです・・・

プロローグ（後書き）

次回は、ホームルームの話題です。

第1章（前書き）

クラスでは、インフルエンザについて、ホームルームの時間に、盛り上がった・・・子供達は、大人が知らないところで、どうなるかを、知っているのだ。

第1章

次の日。

帝丹小学校の朝のホームルームの時間にて。

担任の小林先生から、大切な、話がありました。

「皆さん！実は、吉田歩美ちゃんのお母さんから、今朝、連絡がありました、

インフルエンザで、しばらく、学校来れなくなりました。

今、インフルエンザが、大流行しています。

いいですか？皆さん！

手洗いとうがい・・・だけは、しっかり、家に帰ってから、やりましょうね！

インフルエンザは、本当に、怖いです・・・

あなた達、子供は、特に厳重に注意しましょう！

隣のクラスは、ついに、インフルエンザの影響で、学級閉鎖となつてしまいました。

我がクラスは、そんなことにならないよう、しっかりしましょう！」

先生は、言いましたが、一番に、江戸川コナンから、1つ、質問がありました。

手を挙げる、コナン。

「先生！歩美ちゃん、容態は、どうなんですか？？」と・・・

「大丈夫よ。」先生はこの時は、笑顔で言いました。

コナンは、ここで、1つ、推理始めた。

ウソだ。インフルエンザなんて・・・子供がかかったら、これ、本来なら、一大事のはずだ。

先生は、何かを隠してる！！コナンは、確信していました。

終わった後、小林先生は、算数のテストを返す為、いったん、忘れ物を取りに教室を、出ました。

その間・・・

話は、子供達、歩美ちゃんの容態のことで、大騒ぎだ。

以外に知っているからである。下手をしたら、「死ぬ」こともあるということも・・・？？

「ウソだ。絶対、先生、隠してますね。」光彦。

「お前もそう思うか？」コナン。「ええ。」光彦。

「だってよ・・・大丈夫だよな！な！

どうなんだよ、コナン！歩美は・・・助かるよな？まさか・・・ってこと、ないよな！

冗談・・・に決まってるよな！」元太は、青ざめながら、言いました。

「変なこと言わないで！！」哀は、突然、血相変えて、言いました。

「灰原・・・？」コナンは、彼女を見る。

彼女は、「・・・あの子は、大丈夫。絶対、神様が守ってくれる・・・

あの子は、失いたくないわ・・・あんな、素直でいい子を・・・」

と、祈りだしてしまっていました。

コナンは、そんな哀の姿を見て、笑顔になる。

「大丈夫さ。彼女は、俺達、少年探偵団のメンバーの一員なんだぜ！

必ず、インフルエンザに打ち勝って、この教室に戻ってくると、俺は信じてるんだ。

その時こそ、クラスみんなで、退院祝いやろうぜ！」コナンは、言いました。

他の子達も、コナンの意見に笑顔でうなずいていました・・・

先生は、江戸川君には、隠せないと感じたのか、ホームルームが終わった後のこと。

先生は、後で職員室に来るように、コナンに言いました。

コナンは、「いいか！お前らも！手洗い、うがいは、しっかりしろよ！！」

と、それだけ言い残し、職員室へ向かいました。

職員室にて..

先生は、イスに座ったまま、彼の両手を取りました。
顔は、猛烈真剣です。

「いい？江戸川君。落ち着いて、聞いてね。」先生は、頼みがあると、言い出しました。

「先生・・・大体、覚悟はできてます。

歩美ちゃん・・・そんなに悪いんですね。」コナンは、真剣表情で言いました。

「そう。お母さん心配してらしたの。

でもね。インフルエンザはね、ちゃんと、抗生物質投与して、タミフルを服用すれば、無事に助かるのよ。ところが・・・

彼女ね、タミフルは飲むんだけど、点滴を嫌がって、どうしてもやりたくないって言うの。学校行きたい、病院出たいでね、それはもう、大騒ぎでね・・・
みんなで、止めるのが、大変なの。
お医者さんも、いつか、彼女が、病院抜け出ししないと、不安がってね。

彼女はね、血管が細いから、腕が青くなるのを、見られたくないのね。きつと。」

先生は、事情を話しました。

「先生！俺・・・インフルエンザ予防接種を打っています！俺にできることがあれば・・・言って下さい！！」

コナンは、涙ながらに、真剣になって言いました。

「君は、クラスで一番優秀だし、学級委員も務めてるくらいだから、しっかりしてるしね。だから、あなたにお願いするわ。
彼女も、あなたの言うことなら、聞くとと思うの。」

学校の授業のことは、あなたは、優秀だから、戻ってきても、取り戻せるわ。

その期間中は、学校特別に、来なくていいから、あなたは、明日から、米化病院へ直行してちょうだい！なるべく、彼女の側にいてあげて。

病院抜け出さないように。そして、点滴するように、彼女を説得してちょうだい！！」

先生は、コナンの両手を取ると頼みました。

コナンは、「分りました！僕にやらせて下さい！！」

と、先生に頭を下げて言いました……

「よろしくね！江戸川くん！！」先生は、笑顔で言いました。

こうして、先生から特別学校休暇を取ると、米化病院へ、次の日から、蘭と一緒に、とりあえず、向かいました……

その夜。お泊りセットを、用意していた、コナンは、小五郎と蘭に話しました。

「あーあ……バーカだな……

なんで、子供が、予防接種をうたねーんだよ！

俺達、大人でさえな、あれ3000円出してでも、打たねーとな！

結構かかるとえらいんだぞ！ちよつと、えーかな……

コナン！お前もうがいと手洗いはちゃんとやれよ！！」小五郎は、猛烈に心配していました。

「分ってるよ。おじさん！」コナンは、笑顔で言いました。

実は、毛利小五郎は、沖野ヨーちゃんで紹介で、ついに、CMデビューを果たすことになったのです。それは、子供達の為に、小五郎は、「インフルエンザ。名探偵も、風邪をひく。かからないために、必ずやろう。手洗いうがい……予防接種。」の、インフルエンザCMに抜擢されたのでした。ちょうど、テレビ撮影のため、これから、仕事にという矢先に、かかった人が出てしまったのです。

小五郎は、今回のことで、CMデビューを、真剣にやる決意をしていました・・・

コナンは、準備をした後、手洗い、うがいをしっかりやって、それから、寝ました・・・

次の日。

コナンは、蘭に連れられて、米化病院に、やってきました。

しかし。

ここで、コナンは、ビックリする傾向を見てしまいます・・・

何があったのか。

次回へ続く。

第1章（後書き）

次回から、病院へ移ります。
そこで、コナンは、ビックリした体験をしいられることになります。

第2章（前書き）

タミフルの副作用が出てしまった彼女。
無事に助かるのか？

第2章

次の日から、コナンと蘭は、一緒に大きい花束を持って、米化病院へ訪れました。

ところが・・・

病院の入り口から、突然、逃げて来たのは、まさかの、歩美ちゃんだ。

歩美ちゃんは、点滴を嫌がって外して、病院の外へ出た。

蘭は、それを見て驚いて啞然してしまう。

「まあ・・・そんな、寒い姿で、パジャマ姿で・・・何やってるの！？歩美ちゃん！！
しっかりして！！」

蘭は、大急ぎで、ビククリして、彼女の側へ行きました。

そして、額に手を当てます。

「ちょっとー！！看護婦さーんー！！誰かー！！」蘭は、驚いて声を張り上げます。

「どうしたの？蘭ねえちゃん！」コナンも、側にやってきます。

「どうした？じゃないわよ！触ってごらんなさい？」蘭は、コナンに言いました。

コナンは、試しに、歩美ちゃんの額に手をのせてみました。

「うわっ！」コナンは、さすがに、ビククリ仰天。

子供が、かかるとこれは・・・本当に恐ろしいぜ！！

俺、マジ打っておいてよかった……↑コナンの気持ち

後から、看護婦さんが、バタバタと、走って来ました。

「良かった！入り口手前で止まってくれて！

歩美ちゃん、点滴……注射、ちゃんとやりましょうね……」

と、看護婦さんが、抱きかかえて、コナンと蘭を連れて、中に入りました。

コナンは、病院で、移動式ベッドに乗せられている彼女を見ては、涙こぼし始めた。

そして、看護婦さんと一緒に、部屋に走って……入院室へ……

その間の出来事。

「バーロー！！

ダメじゃないか！！

病院抜け出して！！

点滴ちゃんとやれ！！

ビックリしちゃったよ！！」コナンは、泣きながら一発、側で怒鳴りました。

歩美は、「……コナンくん……声……」と、うつすらと、目を開けました。

そこには、まさかのコナンが側で涙をこぼしてるじゃありませんか？

「コナンくん……泣いてるの……？」

大丈夫だよ。あたし、すぐ復活するから……」歩美は、咳していました。

こうして、入院室に入りました。
個室です。

ここで、点滴をされて、少し落ち着いた彼女。

側では、コナンが、泣いてました。

蘭がそれを、「大丈夫よ。ちゃんとやるよ。彼女。きっとね。」
と、コナンを抱きしめて頭を優しく撫でていました。

「ウワン・・・」コナンは、蘭の胸に顔伏せて、ヒックして
いて泣いていました。

歩美は、どういう状況だったのか、お医者さんから話を聞いて、「
ごめんなさい・・・」
と、誤りでした。

医者は後で、コナンくんに説明しました。

「タミフルの副作用がいよいよ、出たね。」先生は言いました。
「タミフル!？」

俺、新聞で読んだことある!

飲んだ中学生が、精神的におかしくなっちゃって、病院の窓から飛
び降りちゃったとか・・・

やだよ・・・」コナンは、泣いています。

「コナンくん・・・あなたは、帰った方がいい・・・
うつっちゃうよ・・・」歩美は、心配して言いました。

「バーロー!!! 人のこと心配してる暇があるなら、真面目に点滴や
れ!!!」

点滴はな！栄養なんだよ！！

何の為に、俺が今日から学校休んでまで、深刻に側につくと思ってるんだ？

小林先生に頼まれたんだ。

俺が来た以上、真面目に点滴受けてもらうからな！！

注射も！しっかりと！

もし、これで、次の日から嫌がってみろ？

少年探偵団・・・波紋だぞ！探偵バッチ、返してもらうぞ！！

少年探偵団はな、何事にも、勇気持って事件解決するのが、本来なんだぞ！

病気だって同じなんだからな！！

注射、点滴イヤです、泣いて病院抜け出して！！

少年探偵団また、復活したいなら！真面目に病院を退院しなさい！！インフルエンザに今は、立ち向かえ！！逃げるな！！」

コナンは、ビシッと泣きながら、怒鳴りました。

歩美は、さすがに、しゅるんとしたのか、「あたし・・・明日から、点滴真面目にやります！

先生！やって下さい！」と、真剣に言いました。

「よく決意した！それでこそ、少年探偵団・・・の一員ですな。」と、医者は、笑顔でうなずくと、点滴を早速、やりだしました。

「痛いよ・・・」歩美はまうた、ぐずりだした。

コナンは、後から先生に説明を受けて、「あ・・・そういうことか。同じ手しかやれね・・・
だから、あんなに・・・

俺、おかしいなと思った！

でもな、ちゃんと、点滴やる！」と、側で、優しく言いました。

「まーた、おんなじ手・・・いい加減にして・・・」と、歩美は、泣き出したので、「わー！見ちゃダメー！」コナンは、自分の胸に、彼女の頭をガシッと伏せさせました・・・

しばらくは、こういう状態が続きました。

そして、夜・・・蘭は、「後は、任せたわ。」と、言うと、小五郎のご飯作る為、

コナンを置いて、帰りました・・・

「どうした？歩美ちゃん、ねれねーのか？」イスに座って、任天堂DSをやっていた、コナンは、側に来ます。「コナンくん・・・本当に退院するまで、看病するつもり？」歩美は咳き込んでいます。

「冗談じゃねーよ！

俺は、見張りなの！

悪気がなくてもな、薬の副作用で、いきなり、夜中に病院から飛び降りてもらっても、困るんだよ！」

コナンは、言いました・・・

「ふーん・・・あたしは、ならないよ。学校すぐく行きたいもん！」歩美。

「薬の副作用なんだぞ！怖くて、信用できねー！」コナン。

コナンは、ずーっとこうして、深夜も、見張りをすることになりま

した・・・

深夜。歩美ちゃんは寝ています。

コナンは、「ファ・・・」いよいよ、あくびが。しかし、首をふり、「いけない！いけない！」と、両手で、頬を叩いて、目を覚まします。

コナンは、コーヒーを飲んだりして、眠りの限界に達しました。

そして・・・ついに・・・「ス・・・」

コナンは、歩美の側で、イスに座ったまま、寝てしまいました・・・

・
こうして、峠が越して、無事な朝を迎えたのです・・・

第2章（後書き）

次回は、回復に向かいます。

第3章（前書き）

無事に、峠を越して、助かった彼女。
しかし、猛烈勘違いをした、コナン・・・

第3章

こうして、次の日の朝。

歩美ちゃんは、スッキリした顔で、目を覚ましました。

お医者さんや、看護婦さんが、入って来て、「おはよう！ おお・・・随分と、良くなったじゃないか！ 熱も下がったようだ。

これなら、2日後には、退院出来るだろう！」と、笑顔で、頭を撫でました。

「ホント？ 点滴は？」 歩美。「うん。これなら、外してもいいだろう！」 医者は笑顔で言いました。歩美は、「やったー！ バンザイ！！」 飛び上がって大喜び。

「この子のおかげ・・・かしらね。

あらあら、この子ったら、疲れちゃったのかしら？

熟睡よ。」 看護婦さんが、かわいいとクスクス笑っています。

看護婦さんは、このまま、寝かせておいていいかしらねと、医者に話します。

「毛布をかけてあげなさい。彼は、命を救ったヒーローですからな・

このまま、休ませてあげよう。歩美ちゃん、これから、朝の診察なんだが、

彼は・・・このまま、寝かせておくか。」

と、笑いながら言いました。

「起こしても悪いしね。」 歩美は、側で、ありがとうとお礼を言った後、医者と看護婦に連れられて、診察に向かいました・・・・・・

さて。

お昼の12時。

コナンは、ようやく、目を覚ましました。しかし。

「えっ!？」コナンは、ビククリして、時計を見ます。昼の12時
だって!？」

彼はイスから飛び降りると、ベッドが空であることに気がつきます。

血相を猛烈に変えだしたコナン。

その場に、座り込み、何ともいえない、クラーイ表情……………

「ダメだ、俺の探偵としての、人生……
見事に終わった……」と、ガックシ肩を落としています。

人命を救えなかった。

コナンは、ポロポロと涙をこぼします。

「ごめんよう!ウワー!!!ついに……

夜中中に、病院から飛び降りちゃった!守れなかった!!!
歩美ちゃんが!!!わ!!!ついに、助からなかった!!!

お葬式の準備、しなきゃ……わーどうしよう……

俺、黒のスーツ着て、代表で、最後、言わなきゃ・・・言葉を考えねーと・・・

少年探偵団の仲間を集めて・・・」と、葬式を想像しちゃって、泣いています。

そして、コナンは、決断すると、こんなことまで、口走ってしまっています。

「俺を、逮捕してくれ・・・

人を死なせちゃった・・・守れなかった俺は、探偵失格だ・・・ごめんよ、歩美ちゃん・・・恨むなら俺を恨んでくれ・・・」

と、泣きながら1人ごとと言っているの、後から帰ってきた、医者、驚いてしまい、

「は？なーにを、君はさっきから、警察呼んでくれ・・・だの、葬式どうしようだの・・・すごい考えごとしてるのかね？？」と、声がしました。

コナンは、「え！？」涙を突然ふき取ると、側には、笑顔で診察を終え、無事に、2日後、退院が決まった、笑顔の歩美ちゃんがいました。普段通りで、笑顔で、ピースして、平然としています。

「あれ？お前・・・熱は？？」

コナンは大慌てで、側に来て、額に手を当てます。

「あら？コナンくん・・・？？」歩美は、不思議そうな顔しています。

コナンは、「……………」

何も言わず、まーた座り込んでしまい、「良かった〜……………」
もう……………」

心配させちゃ、ダメだからな!!良かった……………」

と、また泣き出しました。今度は嬉し泣きだ。

医者とは、「そうか…………勘違いしてしまったんだね…………いや…………おじさんが、悪かった。」

と、コナンの頭を優しく撫でていました。

「大丈夫よ。君は、1人の命を救ったんだからね。

この、おバカさん……………」と、看護婦さんが、笑顔で、コナンの頭を撫でていました。

こうして、事件も解決を迎えようとしていました。

退院の一日前には、俺と、任天堂DSを、勝負するくらい、元気に回復していった……………」

退院の一日前。歩美ちゃんは、まだ、予防接種を受けてなかったのだ、
で、

俺の呼びかけの元、ついでに打ってから、退院することになりました。
た。

「注射打て!それからしか退院しちゃダメ……………」
「まったく、世話がやける!!」

コナンは、嫌がる彼女を、引っ張っていきます。

患者さんは、もう、それは見てクスクス・・・

「こーらー！そんなところで、捕まって、コアラみてーに！！
少年探偵団本当に、クビだぞ！！ほーらー！診察室入れたら！！
やらねーと、退院後、デートしてやらんぞ！
注射なんてな！チクツとやっちゃえば、んなもんすぐ、終わりじゃ
ねーか！」

コナンは、早く行け！！
と、背中を押すのだった・・・

こうして、歩美は、先生の前で、腕をまくる。
しかし・・・「あたし、やっぱり、結構です・・・」

と、立ち上がろうとした瞬間！！

「あゝゆゝみゝ！」

と、髪の毛を逆立てて、まるで、スーパーサイヤ人みたいに、怒りをあらわにしている、
猛烈、こわーい、コナンがいました・・・

「うわっ！マジ、こゝわゝ！」歩美は、やる決断をしました。

医者はゲラゲラ笑いながら、注射をすませたのでした・・・
看護婦さんも、後で、外へ出て、大笑いしていたのだった。

こうして、「退院おめでとう！気をつけてね！」と、看護婦さんから、花束が、贈られました。

「お世話になりました！」コナン・歩美・蘭は、頭を下げて、帰ろうとした所・・・？？

医者が、「あの・・・コナンくん、ちょっと・・・

君は、一体・・・？」と、不思議そうな顔してのぞいています。

一瞬、まさか・・・と、青ざめて、俺の正体がバレたか？

と思って、ドキっとしたコナンだけでも・・・？

違っていた。それを、歩美が押し切った・・・

「あたし達！普段は、少年探偵団！！」と、かっこつけて、言いました・・・

「そして、俺は・・・江戸川コナン！探偵だ・・・」コナンがかっこつけて言いました。

医者は、「そうか・・・かわいい探偵さん達。

これからも、がんばれよ！」と、笑いながら見送ったのでした・・・

こうして、無事に彼女は、退院したのでした・・・・・・・・・・

第3章（後書き）

次回は、学校へ戻ります・・・

第4章（前書き）

ついに、無事に教室へ戻ってきた彼女。
そこで、待っていたのは、暖かいほのぼのとした、
不陰気だった・・・

第4章

こうして、歩美ちゃんは、無事、元気に学校に来れるようになりました。

教室にて..

「ガラッ！」教室のドアを開けました。

「みんなー!!」歩美は、笑顔で教室に入ります。

「歩美ちゃん!!」

クラスの女の子達が、彼女に取り囲み、「大丈夫だった？苦勞したみたいだね！良かったー！」など・拍手したりで、話題で盛り上がっていました・・・

そして・・・

歩美が振り向くと、後ろには、かっこつけて、身構えている仲間達がいきました・・・

そう・・・「待っていた!!お帰りなさい・・・」のような顔して、笑顔でかっこつけて、立ってるのは・・・?

江戸川コナン、円谷光彦、小嶋元太、灰原哀・・・つまり、「少年

探偵団」のメンバーでした。

歩美は、笑顔で、「ただいま!」と、彼らに言いました……

そして、少年探偵団仲間達に囲まれて……

「歩美ちゃん! 無事、退院、おめでとうございます!
これで、少年探偵団復活ですね!」笑顔で言う光彦。

「やっぱり、歩美がいねーと、メンバーが静かすぎてよ!
かけちまってよ! さまにならねーよな! よかった……」元太。

「待っていたわよ。あなたは、無事に助かると思ってたわ。お帰り
なさい……

ハイッ! これ……休んでいる間の全教科のノートよ。

あたし、まとめておいたの。後で、ゆっくりと、まとめるといいわ。
よく、がんばったわね!」哀は、笑顔で、ノートを渡しました。

「ありがとう……哀ちゃん!」笑顔で言う歩美。

そして、後ろから、江戸川コナンが、代表で、笑顔で、花束を持っ
て現れました。

「退院おめでとう!

これ……俺達、少年探偵団メンバーとして、退院祝いの花束です。」

コナンは、笑顔で、彼女に手渡しました。

「ありがとうございます。」歩美は、笑顔で受け取りました……

今日は、さすがに、花束だらけで、持って帰るのが大変だった彼女だった……

そして、教室で、本日は、ホームルームとなった。

小林先生は、「江戸川くん！みんながね、病院での様子を聞きたいって、待ってるのよ。」

話してあげて……」と、笑顔で言いました。

「ハイッ！先生……」コナンは、立ち上がると、教卓の前で、症状について、話しました……

「ビックリしたぜ。」

俺……症状としてはな、咳が多かったな。歩美ちゃんな。

高熱と、下痢でな……

薬の副作用の影響で、病院を抜け出そうとしたんだぜ。

お前らも、こういうことにならないよう、しっかり、手洗いとうがい、それから……

このクラスで、まだ、注射を打ってねー奴！いたら正直に、手を挙げる……！」

コナンは、真剣な顔して、言いました。

「ゲッ！俺……」あたふたしだした、元太くん。

「えっ！？何ですか？まさか、まだ、打ってない……とか！？」青ざめる光彦。

「ハッ……！大変……あなた、死ぬわ……」哀。「元太くん！」歩美。

「ニヒヒヒ・・・俺は、太って健康だから！いいの！バカは死ななきゃ治らないってか？ギャハハ・・・」元太。

コナンは、側に来ると、元太の肩に、手を乗せて、笑顔で言いました。

「後で、博士と一緒に、インフルエンザの予防接種、受けに行こうな！」と・・・

「いー！？俺・・・俺はいいよ・・・」と、あたふたする元太。実は、怖くてイヤな元太くんだったのだ。

「あー！？歩美ちゃんだって、やったんだぞ。

まーさか、少年探偵団、団長の、君が・・・注射怖いです・・・じゃ、ねーよな？？」

（ニヤニヤ）団長が、一番、打たねーなんてことは、ねーよな？え！？団長さんよ！」

コナンは、笑顔で言いました。「笑顔の裏には、怖さがあるの♪」歩美は、歌いだした・・・

「ゾゾゾゾ・・・」元太は、やりたくないとか怯えて、言い出した・・・

「まあ！団長さんなのにー！吉田さんに、来年から、かわってもらおうかしら・・・」
一番がんばった彼女に、次回、候補しようかな？」哀は情けないとぼやく。

「あー・・・それも、いいね！」コナン笑顔。「あたしは、そんな・・・

」困る歩美だった。

「わー！ダメダメ！団長は、俺だぞ！」元太。

「君みたいなタイプが、一番、危ないんですよ！！
なーに、言ってるんですか！！ちゃんと、やりましょうね！元太くん！」

怒って言う、光彦。

他のメンバーが、元太の顔を「ん」と、怖い顔して、コナン同様、覗き込む。

「インフルエンザ、予防接種ー！！！！やりましょうね！！」

他の3人のメンバーが、怖い顔して詰め寄ってきた……

「わーったよ！！打てばいいんだろ？打てば！！めんどくせーな……」

元太は、打つ決意をしました。

「いよっ！それでこそ、初年探偵団の団長だぜ！！」

一応は、団長なんだから、一応は！」コナンは、笑顔で拍手したのだった……

こうして、元太くんは、博士と一緒に、夕方、インフルエンザを打ったのでした……

こうして、博士の家で、少年探偵団メンバーだけ集まって、退院祝いを別にやったのでした・・

コナンは、一度、ご両親に、話そうかなと、思い、歩美ちゃんのマンションへ一度遊びにやってきました・・・そこで、コナンが、おもしろく見させてもらったものは、一体!?

次回は、吉田家のマンションです。

第4章（後書き）

次回は、吉田家のマンションにて、おもしろい話が、始まります。
次回で、最終回です。

最終回（前書き）

歩美ちゃんのマンションでのお父さんの行動に、密着して下さい。

最終回

こうして、回復後、久しぶりに訪れた、吉田家。

コナンは、実は、その日、歩美ちゃんのご両親から、一度お会いして、お礼したいということで、招待されたのだった。

コナンは、そこで、おもしろい傾向を目にしてしまう。

それは・・・コソコソと、何だか、荷物を詰めて、家から逃げようとしているのは、歩美ちゃんのお父さんだ。

コナンは、まさかと、思い、「ねえねえ！おじさん！どこ行くの？お婆さんと、仲良くないの？そんな、大げさな荷物背中にシヨって、抱えてさ！

家出じゃないよね！」

と、おそろおそろ、聞いてみた。

すると、お父さんは、笑いながら、コナンの頭を撫でながら、こんなことを話しました。

「あのね、江戸川くん。おじさんとお婆さんが、別に、仲が悪いわけじゃないんだよ。

仲はいいんだけどさ。そういう問題じゃないんだよ。分るかね？江戸川くん・・・

お父さんさ。歩美が治ったのは、嬉しいよ。

でもね。そういうことじゃないんだ。

この家ではね。歩美の部屋に・・・入って、遊ばない方がいい。

その部屋は、入ってはいけない、謎の暗い、ミステリーがあるのだよ・・・

それは、インフルエンザの悪い、小さい、こんくらいなの。目には見えない、

バイキンマンがさ。

あっち、こっちに、ウヨウヨ、フラフラとさ。カーテン閉めていたもんだから。

歩美の部屋中に飛び散っていてさ、お父さん、もう、やんなっちゃう。

イッヒヒヒ・・・お父さんさ、実は、歩美が入院している間、

歩美の部屋を掃除していたらさ。

後で下痢してさ。

親戚の人も、遊びに来たいとか話してたんだけど、今はいかんと話して断ったんだよ。

お父さんね、年が年でしょう？

だでさ、お母さんに話してさ。

しばらく、お父さんの実家で、過ごそうと思うんだ。

何もないと思うんだけどさ。何か感じるもんなんだよ。

これが、男ならな。我が家のバイキンマンと言うとただけだな。

家は、女の子だから、我が家のバイキンちゃんだ！じゃ！おとぼり、さめるまで・・・

また、一週間後、もどりまーす♪ありがとう！コナンくん！」と、手を振り、笑いながら、逃げるようにして、家を出て行ったのだした・・・

「我が家の、バイキンちゃんとは、何よ!!」歩美の怒鳴り声がしていました……

コナンは、「プッ……」歩美を見ては、後ろ向いて、「ギャッ! ハハハ……」

おいおい、我が家の、バイキンちゃんって……」と、おなかを抱えて笑い出したのだった……

お茶を飲んで落ち着いた後、おばさんに、笑いながら、「すごい、ひょうきんだね! おじさん! あーあ……うんうん。何か、おじさんの言うこと分る気がするぜ。
俺も病院泊まったけどよ……

注射打ってあってもさ、何か……
やっぱり、感じるもんなんだよな。

本当は、何か、菌を撃退するスプレーか何かでさ、あそこの、入院室もやった方がいいんだよ! そういうスプレーが出てくるといいね!
」コナンは、笑顔で言っていたのでした……

そして……やれそうくな人が、1人、人物がいた……

そう、アガサ博士だった。

コナンは、歩美ちゃんのマンションで、「ありがとう……」と、お辞儀して、

「じゃあ、明日、学校でね! バイバイ!」で、いったん、別れた後、博士の家で、ある1つのアイデアを出したのでした……

「へー・・・吉田さんのご両親に会ったんだ。」哀。

「ああ、挨拶してきたぜ！でもな・・・アハハハハ！

あの、お父さん、すんげーおもしろい！」コナンは、おなかを抱えて笑いながら、

出来事を話しました。

「うわっ！我が家のバイキンちゃんって・・・」笑い出す哀だった。

「ふーん・・・確かにそういう菌を撃退するスプレーのう！

ワシも、研究しようかのう！」博士は笑顔でいいアイデアじゃと言いつ出した。

「そうすれば、ノーベル章間違いなしだぜ！」コナン笑いながら言いました・・・

こうして、アガサ邸で、久しぶりの笑いが飛び交うのでした・・・

こうして、事件は、無事に、解決したのでした・・・

（終わり）

最終回（後書き）

最後は、こんな感じで仕上げてみました。
ありがとうございました。上手く、いい具合にまとめられるようになれました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1623b/>

インフルエンザ事件

2011年10月3日17時00分発行